迷い音は一つの楽器に

アシヴィン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷い音は一つの楽器に

【Ｎコード】
Ｎ００９４Ｘ

【作者名】
アシヴィン

【あらすじ】
これはマビノギという世界の中のどこにでもありそうで無い・・・ような物語。
一人のエルフの少年は、初めて来た村「フィリア」から出て
いろんな人の出発点ともされる「ティルコネイル」へ向かいます。
自分のやりたいことを探すために。

あるエルフの少年の物語　第1話（前書き）

※この小説は初心者が素晴らしく適当に書いているので、所々グダグダになってたり、話がまとまってなかったり、誤字脱字があったりしますのでご注意ください。

あるエルフの少年の物語　第1話

ふと目がさめるとなんだか、よく分からない場所にいた
やけに真っ白くて・・・
ていうかフクロウうるさい。しかも数多すぎ。
でもなんでボクはここにいるんだろ？

「私が呼んだのです」
声がした方向を向くとそこには
すごく綺麗な黒服の女の人がいた。

そしてその人は
「ようこそ、エリンへ。
・・・お名前は？」
と言った。
「・・・ボクは」

パチっという音で夢から覚めた。

また同じ夢を見た・・・

「名前、名前・・・なんで思い出せないんだろ？」

そう、ボクは自分の名前を知らない・・・覚えてない。
誰かが知ってるような気がするけど、その誰かっていうのも知らない。

あー考えまとまらないよ
まぁ寝起きだからだね仕方ないもんね
いろいろ考えながらティルコネイルという町に向かっていた。

理由は・・・

人が少なそうだから

「人いないといいなぁ。」
と考えるのがボクにとっては当たり前なのだ。

他人と話すのは苦手
他人と一緒に同じことするの無理
自分ひとりだけ、取り残されてしまえばいーのに

まだ空がすこしだけ明るくなってた頃
ボクは町・・・村？
どっちなんだろなぁって思うくらいのどかな
ティルコネイルに着いた。

「イメージとちょっと違うけど・・・ひといなさそうだしいいな」

と思ったその時。

広場に誰かがいた。
うわぁ・・・いきなりですか

「・・・音はずしたかな？」
とボソボソ言ったその人は

茶髪でポニーテール。服はピンクと白。
すっごい派手好きなのかなぁ

「・・・・1、2」

すこし待つと、リュートの音が聞こえてきた。
どんな曲かは分からないけど・・・

ボクは少しの間、そこら辺にある木の陰に隠れながら
音を聞いた

あ、はずした

「んにゃー！」

ネコかあの人はっ

「弦切れたー！！」

えー

すぐさまその人は雑貨屋さんの所に飛び込んだ。
ボクはドアの隙間からこっそり見てみようと思った。

バンッ

「お金おか・・・うぉわ！？」

クリティカルヒット。

「いやごめん！ヒールするから許してネ」
軽い口調で言いながらヒールしてくれるその人は
いい人なのかもしれない。

「しっかしまさか雑貨屋のドアが顔面にヒットするとはにゃー・・・
何してたん？」

「・・・・」
答えられなかった
ボクは人が苦手なんだし
もちろん話すのだって無理

「・・・あ、初対面だと話しにくいわなアッハッハ！
じゃ、せめて自己紹介しない？」

何言ってるんだこの人
名前すら知らないボクに・・・聞かせてあげることなんて無いよ

「まぁあたしからね。
あたしの名前は・・・」

「いいです。」

ボクはそっけなく答えてそそくさとそこから離れた。
・・・これでいいんだ

あるエルフの少年の物語　第2話

その後ボクは、野宿した。

寝てる場所がどれほど危険かも知らずに・・・

「・・・・ふぁ～」

思いっきりあくびをすると、周りの風景が変わってるのに気づいた

あれ？昨日はもうちょっと広くて、階段とかもあって開かない扉もあった

・・・はずなんだけどなぁ？

今見ている部屋っぽいのは、狭くて目の前には変なおばさんの石像があるだけ。

このおばさん、寝る前にも見たっけ？

「・・・・ここ、どこ？」

ぽつりと言った。

とにかく出口を探そうと、目の前にある門？を潜り抜けていった。

1時間後

「これ、なら、人の・・・げほっ
方が、まし、だよなぁ・・・ひぃはぁ」

なんですかコレ
変な動物ばっかり出るんですけど。
ネズミはちっちゃいけど噛み付かれると痛いし、
コウモリは飛んでくるからこわいし、
クモなんて・・・論外だ・・・

大きな赤い鍵は重たいし・・・はぁ

で、出口どこだぁ～

ぶつぶつ言ってるそばからなんか大きな鍵穴のある扉が見つかった。

「出口でありますように、出口でありますように」
そう祈りながら鍵を開けた。

ガチャン！

祈りは届かなかったようだ

大きく広がる部屋の中には・・・苦手な・・・
クモがたくさんいて

更にトツゼンヘンイ?で大きくなったクモが一匹いた。

泣きたい。
誰かに助けを・・・

なんて思ったのはボクの人生の中でこれが初めてかもしれない
だけど、助けを求める相手なんていない。
いなくていいと望んだのだから。

そうしてるうちに赤いクモがボクに気づいて、早足でこっちに近づいてきた。

あぁ、ボクはここで死ぬんだ
それもいいかな

「間に合えっ！」

ヒュン！

いきなりで何がなんだか分からなかった。
だけど今まで目の前にいたクモは矢に貫かれて・・・倒れてた

「ちょい君、大丈夫？ケガは？」

声のする方向を向くと、そこには
昨日広場で会った人がいた。

「なんで、ここが？」

「朝方、トレボーから聞いたのさね。
『エルフの少年がアルビダンジョンに向かったまま、帰ってこない』
ってね」

だ、だんじょん？
ボクそんなとこで寝てたのか・・・・・

「で？どーしてこんなダンジョンに？」

「野宿しに・・・」

「・・・どーりで祭壇に置かれたアイテムが『初級通行証』じゃない訳だにゃ」
しょきゅーつーこーしょー・・・？
「後で説明するから、君はここに居てね～」
「・・・え」

数分でクモを全滅させて帰ってきたこの人は一体何者なんだろ
しかも弓。

「よっし、終わり！ほら箱開けにいこう！」
「は、はこ？」
強引に連れて行かれた先は、最初みたおばさんの石像と
２つの鍵のかかった宝箱がある部屋だった。

「好き方選んでね～」
「ボク、鍵持ってません」
へ？と首をかしげる弓使いの人。

「鍵は上から降ってきて絶妙のタイミングでカバンの中に入ってる
はずだよ」
「え・・・　あホントだ」
どーなってるのこの世界

パチパチという音で我に返った。
目の前にはキャンプファイアがあって
横には広場で会った人が座っている。

「あーくつろげるー」
キャンプファイアさえあればどこでもくつろげるというこの人は
ある意味尊敬できそう。

「あ、そうそう
昨日自己紹介の途中で終わったから、今続きしない？」

まだする気でいたのか。
でも助けてくれた恩人だし・・・それに
この人だったらいいかな、と思った。

「昨日はすいません」
「へ？あぁ気にしてないない」
あっはっはと笑いながら頭をポンポンされた。
すこし悔しかった

「んじゃ、あたしからね。
あたしアシヴィン。フルネームもあるけど・・・まぁそれは置いとく。
君と同じエルフでねぇ職業は・・・器用貧乏？」

「弓使いだけじゃないんですか？」
「魔法も時々やるし、時には剣だって使うし・・・
あ、楽器もやってるよ！」

いろいろやってるんだなーこの人。
でも大変そうだなぁ

「はい、じゃあ次！」

自分のことを忘れてた。

あるエルフの少年の物語　第3話

「ボクは名前知らないんです。だけどフィリアから来たっていうのは分かるんです」

「ありゃ、名前知らないのかぁ。
ナオから自分で名前考えろ的な事言われなかった？」

「？？？」
ナオって誰ですか。

「ナオ知らん？真っ白なとこにいくと会える、黒いチャイナドレス風の服着た
女性なんだけど。」

・・・あの人だったのか

「覚えてないです」
「そっか。まぁ気にしない」

今だけ、ボクの記憶力のなさを呪った。

「うーん、名前ないと不便？」
ちょっと考えた。

・・・不便すぎる

「不便です」
「だよねー・・・うーん」
アシヴィンさんは唸りながら言った
何考えてるのかな？

すると突然

「あ、いい方法あるよ！」
「え？」

「君、あたしの家族になったらいいよ！」

・・・この人よくわからん。

～朝～

昨日は変な夢をみた。
夢であって欲しいと思った。
いやそうじゃなかったらボクはどうすればいいんだろ？

「おっはよー！ゴハンできとるよー」

やっぱり夢じゃなかった。

ゆうべのアシヴィンさんの「家族宣言」が痛い・・・
なんでいきなり？っていうか名前だけでいいのに。

「心配しなくったってあたしにゃー妹&弟わんさかいるもの。
一人増えてもむしろ歓迎だって！」

今なんていったんですか。
そのセリフなんか怖い。

差し出された「涙のうどん」を食べながら話を聞くと。

アシヴィンさんは自称寂しがりや。
で、ここ(エリン)に来て最初の目標が
「大勢の家族を作ろう！」
だったという。

・・・そういう風に考えれるアシヴィンさんが羨ましい

「んでねーあんまりにも人数多すぎになったから、分けたの。
あたしんちの名前はクラシアス。もうひとつがクウォーエルティ。」

うわぁ、この人大丈夫かな
そんなフルネームまで作って何が楽しいんだろ？

「名前、せっかく自分で考えて自分で言えるんだからさー
フルネームくらい、いいと思わない？
・・・ネーミングセンスないってのは認めるよ。うん。」

結構面白い人だ。

「じゃあボクはどっちになるんですか？
・・・入るとしたら。」
「エルフだから・・・クラシアスかな？」

どうやら種族別に分けられているらしい。
人間のほうが多いって言ってたし、いいかな

「で、どーする？うちにくる？」

悩む。

ボクは一人でいたいと思った・・・
だけど、今はすこしいいかなとか思ってしまう。
うーん

「考えさせてください」
これしか言えなかった

「うん、いつでもいらっしゃい！

歓迎するよー」
にっこりと笑いながら言ってくれた。

そして途中の道でわかれ

「暇だしついてっていい？なんか心配だし」

られる訳がなかった。

あるエルフの少年の物語　第４話

アシヴィンさんが作れる、というより作ろうとしたごはんは全て
自動で「涙のうどん」に変化するということが判明した。

毎朝、うどんばっかりだったから
一回質問してみた。
「なんでうどんだけしか作らないんですか？」と。

「あたし、クッキングポーションお気に入りでさー
あ、ベイクドポテトにもクッキングポーションいれるとうどんになるんだよ？
面白いよねー！」

えー・・・

それ面白いというより不思議の領域じゃ・・・

でもなんか美味しい。涙あふれるけど。
ちなみにこの「涙のうどん」は食べると一定時間泣いてばかりになる、という
迷惑な効果があるらしい。

おかげでボクの服がぐしゃぐしゃになってしまった。
アシヴィンさんも同じらしく

「今からうちにいって服変えるんだけど・・・君の服も選ぼうか？」
という感じになった。

「いえ、大丈夫です。このローブ乾き早いし・・・」
「風邪ひいたら困るでしょー？案内するからおいでよ！」

かなり強引だ。

ティルコネイルの広場から、何かの羽根のようなアイテムを使った。
すると、農場のようなのどかな場所に出た。

「ふわー」
「さ、ここがあたしんち。どーぞどーぞ！」

周りは砂漠みたいだけど今ボクがたっている場所は緑色の庭。
畑が３つあってその周りを丸太の柵が覆っている。
畑の周りには花畑があったり、池があったり、リンゴの木と赤いハーブまである。
そこにどどんと大きい家があるわけで。

「あら・・・お客様ですか？」
紺色の髪と目をした、ヒーラードレスを着た女性が言った。
そういえばアシヴィンさんもヒーラードレスみたいだけど、この人

の着てる物と
ちょっと違う。

「ふっふっふー家族予備軍だよー！」

いつの間に・・・ってそうなってたんだっけ。
忘れてた

「・・・姉さんの悪い癖ですね。その心配性と家族につれこみはほどほどにしてください。」
「いいじゃないのさー賑やかがいちばん！」

アシヴィンさんって姉なのに威厳なし？

「っと後でも紹介するけど、とりあえず！
この子はブルーカノン。」
「初めまして。ブルーカノン・クウォーエルティと申します。
名前が言いにくいのであれば、カノンで結構です。」
「は、初めまして。」

さらりと丁寧な自己紹介で、アシヴィンさんの妹さんとは思えない。

「・・・では私が案内します。姉さんは洋服を。」
「ありがとにゃー！」

中は広いとも狭いとも言えず、ちょうどいい感じだった。

「そういえば・・・貴方のお名前を聞いてませんね。

よろしければ・・・」
「ボク、名前知らないんです。すみません」
「いえ、こちらこそいきなりで申し訳ありません」
なんかすっごいやりにくい。

そんな会話をしながら、広い部屋に案内された。

「ここでお待ちください。姉をよんで・・・」
「おっまたせ～！」
「・・・・」

噂をすればなんとやら。っていうか噂すらしてない！

「いやー君の服選んでたら迷っちゃってさー」
と言いながらテーブルの上に3着、服を並べた。

「イベントでもらったやつばっかだけど、これしか男性用ないんだごめんよ」
「そ、そこまで気を使わなくても大丈夫ですよ
っていうかどれも見たことない服だなぁ」

ひとつはローブみたいな服でベルトみたいなのがついてる。
色はボクの目に似た深緑。

もうひとつは・・・寝間着みたいな服で上着とズボンに分かれてる。
色は黄色と緑。

最後の服は・・・恥ずかしくていえない。

「どうかな？」

「えっと・・・じゃあこれ！」

ボクが選んだのは二つ目。動きやすそうだったから。

「ＯＫ！じゃそれ貰ってって！」

「ありがとう・・・ございます」

着てみるとやっぱり動きやすかった。

それに黄色はキライじゃない色だった

「おおおおおおおお似合うやん！」

「すごくお似合いですよ」

なんか褒められると照れくさい。

あるエルフの少年の物語　第5話

服を貰ったその後、いろんな人がやってきて自己紹介をした。

アシヴィンさんと似た茶髪のくせっ毛で、カノンさんと同じ服の色違いを着ているノヴァリースさん。

鎧が普段服という真っ赤な髪に真っ青な目をした双剣の女神さん。

エルフらしい雰囲気を持った、薄い紫色の髪と、アシヴィンさんと同じ目の色をした心（こころ）さん。

無口そうな自称ヒーラー見習いの、オレンジ色の服が似合う橙さん。

かぼちゃローブを無理やり着せられたという、かっこいいジャイアントの流星さんなどなど。

まだ他にも自己紹介してくれた人がいるけど、一度には覚えきれない。

っていうかアシヴィンさんどんだけ家族にしてるんだか・・・

「みんないい奴だから、警戒しなくても平気だよん」

といわれても緊張しまくってるボクにはそれは無理だ。

だってこんな大勢の人と触れ合うなんて想像もしてなかったから。

「姉上。その子を家族に入れるのは反対はしないのだが・・・

顔が真っ青になっているぞ。」

「わぉ！どしたの？休む？」
流星さんとアシヴィンさんが心配そうにこっちを見る。

そりゃ真っ青にもなる。
慣れてないのだから。
っていうか緊張しすぎ？

「お言葉に甘えさせてもらってもいいですか・・・？」
「いいよいいよ！さ、案内するから」

でも、ここまで他人と話してても
いやとは思わない自分。

・・・びっくりだ
慣れてる途中なのかなぁ

そうだとしたら

家族になるの、いいかも知れないなぁ
それに、ここにも馴染んでみたい。

「はいな、ここで休んでね！欲しいものあったら遠慮なく言っていいから～」
「えっと、アシヴィンさん」
「お？何？」
「欲しいものあるんですけど・・・」
そう思えれたのはこの人のお陰かもしれない。
だから、そう望んでもボクは悔やまない。

「ボクを、家族にしてくれますか？」

アシヴィンさんはゆっくりとボクの方を向いて、笑った。
「歓迎するよ、新しい家族・・・いやあたしの弟さん！」
「・・・よろしく、姉さん」

そうしてボクは、アシヴィン姉さんの弟としてクラシアス家に入った。

自分が思ったことが唐突すぎて、自分でもびっくりした。

そしてその後眠ると、またあの人が出た。

「お久しぶり、ですね。」
最初に会った黒服の女の人。名前は・・・なんだっけ？

「名前、なんでしたっけ？」
「覚えてないんですか？・・・私はナオです。」

ナオさん・・・ナオさん、よし覚えた。
こうでもしないとボクは覚えない。

「・・・それで、お名前は決まりましたか？」
「まだですけど、家族はできました。」
「それは素晴らしいことです・・・！よかったですね」
まるで自分のことのように喜ぶナオさん。

「では、名前はご家族と一緒に考えたほうがよろしいかも知れませんね。」
「そのつもり・・・です」

ナオさんは優しく微笑み、「ではそろそろ戻る時間です。」と言った。

「今日も貴方の日常が平和でありますように・・・」

ボクもナオさんも光に包まれたと思うと
目が覚めていた。

「・・・ハイテク？」
独り言をつぶやく。

～朝～

「ふぃー」
背伸びをしながらあくびをする。

「あっさごはんだよー！弟よー！！」
ノヴァリース姉さんが元気よく部屋に入ってきた。

「ルーシェのごはん、持ってきたよ～」
「わ、いただきます！」

ルーシェ姉さんは白い髪に白い目のエルフ。錬金術師らしいけど・・・ドジな所がある。
けど、ごはんはとっても美味しい。

ボクは昨日、真っ青になって倒れかけ寸前だったのでベッドの上で食べることにした。
真っ青になった理由は・・・いわなくてもいいか。あはは

トーストの耳のところをカリカリかじっていると、音楽が聞こえる。
アシヴィン姉さんの日常的な事だ。

とても陽気な音楽で、ちょっと楽しくなってくる。

そうしてまた、ボクの日常が始まる。

あるエルフの少年の物語　第６話

ボクがクラシアス家にはいってから、１ヶ月が過ぎた。
時間がたつのは結構早いなぁ・・・
家族全員ともうすっかり慣れてきたし、更には妹さんまで出来た。
姉さん、ほどほどに。

「にーちゃん、おかしちょーだい♪」
「さっき食べたばっかだろ？我慢しなきゃ」
お菓子を毎日ねだるのはヴィニエンス。さっき言った出来立てホヤホヤのボクの妹。

「おかしは、エンスのエネルギーなのー」
「じゃあそのままま丸になるんだねー。マタタビ茶のんだ姉さんみたいに」
「・・・やだ」
「じゃあもうダメだよ」

「・・・呼んだかいなスペル」
ペンギンローブが似合うようになったアシヴィン姉さんがやってきた。

あ、スペルっていうのはボクの名前の愛称。
ようやく名前が決まって嬉しい。

そう、これからボクの名前は「スペルニア」。
みんながつけてくれた、名前。

「にーちゃん、エンスはねーちゃんのためにきのみをとってくる！」
「あ、いってらっしゃい。気をつけてね！」
「あたしもついてくよ・・・ってか待ちなさいヴィニエンス～！
置いてくなっ」

今日もボクらは賑やか。

・・・ちなみにマタタビ茶は、飲むと思いっきり太るって姉さんが
言ってた。
恐ろしい。

「ちょっとタラまで出かけてくるよ。留守番よろしくっ！」
「うん、いってらっしゃい！」
この頃姉さんが遠くまで出かけることが多い。

まぁ、ボクには関係ないけど・・・

「・・・スペルニア。私は新しい本を買うから。」
「その前に整理したほうがいいんじゃ・・・」
「もうしてあるから、大丈夫よ。」
「そっか」
心姉(こころ)さんは本が好きだ。
中でも「トレイシーの秘密」と「可愛いのはイヤ」・・・
どんな本なんだろ？

「ふぇー」
部屋の中で一人になったボクは背伸びをした。
そして、テーブルに寝そべったまま寝た。

～夕方～

おかしい。
姉さんが帰ってこない。
昨日までは、この時間に帰ってくるのに・・・

「・・・すこし遅いわ。」
「ですね。」
心姉さんと女神姉さんも心配そうだ。

「ボク、探してみる」
どこに行ったか忘れたけど。

「・・・待ちなさい。」
「待てないよ！」
「そうじゃないわ、これを持っていきなさい。」
渡されたのは、新品のブロードソードとカイトシールド。
姉さんが向かったところは危険なところなんだろうか？

「用心のためよ。気をつけなさい。」
「分かった、ありがとう！」
そしてボクはアシヴィン姉さんを追った。

目的地も知らずに。

数時間後。

迷ったぁあああああ！

あるエルフの少年の物語　第7話

目的地覚えてない＋
今いる場所がどこだか分かってない
＝迷子

数式作ってどーすんの！？

あぁああどうしよ、ボクが姉さんを探すんじゃなくてみんながボクを探す状態に
なりかけだよぅ・・・・
同じような道ばっかだし

とぼとぼ歩いていると、声がちょっと聞こえた。

「・・・・・はははは」
「・・・・・・・をしよー」
「・・・・・・ふふふ」
この声、なんだろ？

小さな子供が遊んでる声みたいだ。
空暗いのに、まだ遊んでる。

・・・空？
ないよ空なんて。

代わりに変な色の雲が広がってるだけ。

じゃあここどこなんだ？

「貴様っ！そこで何をしている！！」
「！？」
後ろから叫ばれたのでびっくりした。

「ななななんですか！びっくりさせないでください！」
「あ、いやついな・・・すまない。」

「・・・・」
「・・・・」
静かになった。どうしたのかなぁ？

「じゃなくてだな、お前はここで何をしてる？」
「ボクは姉を探してる途中で迷子になりました。ここはどこですか？」
「・・・ふむ、出口に案内しよう」
親切な人にあったなぁ～

時間がどのぐらい過ぎたんだろう？
黒いローブの人に案内されて、ボクは歩く。

「さぁ、着いたぞ・・・」
「ありがとうございます」

大きい筒のような壁を抜けて中に入ってみると、かまどのようなものが並んでて
他には誰も居なかった。

「これ、どうやって出るんですか？」
「あぁ、それはな。」
そう言われた途端

力が抜けていった。

「お前がこの実験の・・・生贄になれば。」

何のことか分からず、気を失った。

目を覚まして見たものは。
黒い闇が広がる場所
その中心に感じる生命体

感覚すらない闇の中で聞こえてくる声。
「・・・・もうすぐで実験を開始できます。」
「そうか。準備を急げ。」
誰かが、実験をしようとしてる・・・？
何を使って？

「子供を見張れよ？逃げられるとこの実験は失敗する。」
「分かっているさ、早く準備しろ。」
子供を・・・使うなんて
何がしたいんだこの人たちは
「エルフも混じっているが・・・むしろいい結果を生み出すだろう。」
「捕まえてよかったよ」

それってボクの事ですか・・・やだなぁ

他にも何かいってるけど、いやな気分になるから聞かないことにした。

「さぁ、実験をかいｓ・・・」

「はいはいはーい、そこまでにしてね？」

聞き覚えのある声が響く。

「あんたら、今なら許してあげるからさー降伏したら？」

「何をほざくか・・・雑魚が」

「カッチーンと来たわぁ、今の・・・」

あれは・・・姉さん？

「ん・・・？スペル！？」

「あのエルフの子供の知り合いか？残念だったな。

これから実験で使われるのだからな！」

「・・・・」

直後、姉さんがまばゆい光に包まれた。

「私を怒らせたことを、不幸と思え」

そう言うと、光の中から姉さん・・・え、あれが姉さん！？

「な、なんだと！」

姉さんの姿は普通とは違ってた。

あるエルフの少年の物語　第８話

あれは、姉さんなのか？

全身は光に包まれて。
背中には白い半透明の翼。

「その子達を今放すのなら、この場は見逃そう。
それを断るというのなら・・・・」
「どうするというんだ？」

「この場を消し飛ばそう。今の私になら出来る事だ。」

話し方まで変わってる姉さんはすごく怖い。
っていうか一体どうしたの姉さん！

「待て・・・」
「メリキル、危ないぞ」
ラスボスの名前なんだろーか。

「放す、というのは守ろう。」
「・・・ならば今放せ」
「それはこちらの実験が終わってからにしてもらおうか！」

「実験開始！」

闇の中に苦痛の声が響く。

ボクも叫んでるのか、分からない。

ただ、姉さんが光の槍を飛ばすのが見えただけ。

「・・・・・！」

「・・・スペル！起きて！」

いつの間にか、また気を失ってたらしい。

でも生きてる。

「はぁ、よかった・・・死んでしまうかと思ったよ」

「・・・・姉さん、他の子は・・・・？」
「・・・・」
姉さんは暗い表情を見せた。
「耐え切れなかった。もう手遅れだよ・・・・」
何故ボクだけ生き残れたんだろう？
何故こんな事をするんだろう。
許せない。
「スペルはここから帰ってね。・・・・あたしはタラに報告に行くから。」
「待って姉さん！」
「？」
「ボクも協力させて欲しいんだ」

それから、ボクは姉さんと一緒に行動するようになった。

あるエルフの少年の物語　番外編　～影の世界へ～

あたしは、シネイドおば・・・じゃなくてさん、ね

その人からクエストを受けて今！

絶賛影世界突入中。

どうやら、この奥に変な実験しようとしてる輩がいるらしいよーうん。

「あーあ・・・だっるー」

ブツブツ言うのはあたしの十八番だったりする。

そうして２０分もたったころ。

「・・・おねえちゃん、そこでなにしてるの？」

「あらーっ」

９歳か１０歳の子供に出会った。

親どーしたのコラ。

「君、おとうさんかおかあさんは？」

「おとうさん・・・はいましごとなの。だからあそぼう？」

「ごめん、急いでるから・・・！？」

突然あたしと少年の周りに敵が現れた。

「おねえちゃんのおともだち？うわぁ～すっごいな！」
「いやいやいやあたしこんな友達いないし！」
そんなのとなりたくないし。

出てきたのはゴーレムと・・・硫黄クモ。
こりゃ子供には危ないわ。

「君はどっかにかくれ・・・」
「あっははー！おねえちゃんみて！のぼれたよー？」

少年が、ゴーレムに乗って遊んでる。
気楽でいいなぁ・・・

「降りなさい！」
言うと同時に矢を放つ。

ズドン！ガラガラガラ・・・・

「うはははははったのしいねー！」
「・・・君、天然？」

ゴーレムが倒されて、ムカついたのか。
クモが一斉に襲い掛かる。

「ちょっ多すぎ！」
「おにごっこ～！」

数分後、全滅。

いやもちろん敵が。

「きゃはははは、もうおしまい？」

「うん、お終いだからねー」

敵と戦う以上に、この少年の相手は疲れるかも。

「あのねぇ、おねえちゃんがあそんでくれたおれいにねぇおとうさんのところつれてってあげるー」

「え、いやちょっと待って・・・うわぉ！」

ぐいぐい引っ張られていくあたし。

「ついたー！ここがおとうさんのしごとば！」

「うっわ、怪しいなおい」

影世界にはよくある円状の壁。ということは・・・

ビンゴ！

「中入れてもらっていい？」

「うーん・・・まってて！きいてくるー」

そう言って少年は壁の内側に入っていった。

「おっそいなーもう入っちゃえ！」
３０分待たされたら誰だってこういうはず！
というわけで突入。

はい、大当たりどストライクーパチパチパチ

「はいはいはーい、そこまでにしてね？」
どんな場面にたっても素でいられるあたし。

「あんたら、今なら許してあげるからさー降伏したら？」
「何をほざくか・・・雑魚が」
「カッチーンと来たわぁ、今の・・・」

ま、そうなるっていうのは予想してたけど。
アホだし（笑）

と、鼻で笑ってたらとんでもない人物発見。
スペルニアらしきエルフが縄でぐるぐる巻きにされてた。

「ん・・・？スペル！？」
確認のため言ってみる。

「あのエルフの子供の知り合いか？残念だったな。
これから実験で使われるのだからな！」
「・・・・」

その瞬間、頭の中に満ち溢れた感情は「怒り」
子供を使って実験なんて。
更に大事な弟までその材料！？ふざけなさんな。
即、「光の覚醒」を使う。

体が軽くなり、力が満ちてくる。
半神の証の白い半透明の翼がつく。飛べないけど。

あたしは言う。

「私を怒らせたことを、不幸と思え」

その場に居る全ての敵に、警告を。

あるエルフの少年の物語　番外編　～影の世界へ～2

淡々とあたしは告げた。

「その子達を今放すのなら、この場は見逃そう。
それを断るというのなら・・・」
いったん言葉を切って相手の様子を見る。

「どうするというんだ？」

「この場を消し飛ばそう。今の私になら出来る事だ。」
脅しじゃない。本気でそうするつもりだ。

「待て・・・」
まだ声変わりしていないような、少年の声。

「メリキル、危ないぞ」

どうやらメリキルという名前らしいけど、今のあたしには関係ない。

相手も動じておらず淡々と言う。
「放す、というのは守ろう。」
「・・・ならば今放せ」

本当に守るかどうかもわからない。っていうか守らないでしょ？

「それはこちらの実験が終わってからにしてもらおうか！」
ほらね。

「実験開始！」

まさかすぐ始めるとは思わなかった。

あたしはすぐさま「スピアオブライト」を撃つ。

目の前が消し炭になるまで。

怒りが収まるまで。

「おーい！スペル！」

「スペル！起きて！」

ほっぺたを何回か往復ビンタする。

ゆっくりと目を覚ますスペル。

無事でよかった。

「はぁ、よかった・・・死んでしまうかと思ったよ」

その言葉も届いてないのか、スペルは周りをキョロキョロ見る。

そして聞いた。

「・・・・姉さん、他の子は・・・？」

「・・・」

一瞬迷う。
言っていいのか、言ってはダメなのか。
隠し事は出来ないのだから言ったほうがいいんだろう。

「耐え切れなかった。もう手遅れだよ・・・」
コレしかいえない。

音もなくその場に倒れ、血を流していないのに息をしていない子供たち。
それをそのまま言うなんてできっこない。

すこししてあたしも落ち着き、報告のためタラに戻ろうと思った。

「スペルはここから帰ってね。・・・あたしはタラに報告に行くから。」
「待って姉さん！」
「？」
突然、スペルが叫ぶ。
あんまりそういうことないので驚く。

「ボクも協力させて欲しいんだ」

分かった。一緒に行こう。

さーて、手続きが大変そーだにゃ。
あたしも頑張らんと。

あるエルフの少年の物語　番外編　～影の世界へ～２（後書き）

ちょっと煮詰まってきましたので、続きは１０日くらいになります～

あるエルフの少年の物語　第9話

アシヴィン姉さんは、忙しそうに手続きを終えた。
何の手続きかというと、ボクが姉さんの補佐・・・だっけ。
補佐になるための手続き。

「ふぃー終わった終わった！」
「お疲れ様、姉さん。」

さっき、「連れてって欲しい」と言ったとき反対されるかと思ったのに。
なんですんなり「いいよ」になったんだろう。

「実地訓練と思うといい・・・かな？近接やるんだし。」

あーそれでかぁ・・・

ボクは姉さんの、器用貧乏ぶり（弓に近接、魔法に吟遊詩人。）を見て
「・・・どれか一つに絞ろう。」と決めた。
その決めた道が、剣士。
エルフなんだけどね。

「エルフ剣士なーんて今じゃいくらでもいるさね。あたしもだし。」
「姉さんは器用貧乏でしょ・・・純粋な剣士っているの？」
「いるよ？普通に。グラディウスとヒーターシールドもってウィン

ドミル大好きなエルフとか。
フル改造メイス持ちでスマッシュマスターエルフとかいるしねぇ。」
すごい人もいるもんだ・・・
ボクも頑張らないと！

ぽす、と何かが落ちた音がする。
横に振り向くと、姉さんの頭の上に巻物のような紙が乗っかっている。

「ぬぁ、フクロウめぇ！」

姉さんはフクロウ便をうまく受け取れないみたいだ。（反射的な意味で。）

「おーシネイドおばは・・・じゃなくてシネイドさんが呼んでるわ。行くよ！」
「うん！」
シネイドさんて人、老けてるのかなぁ？

「何がご用件・・・あぁ、アシヴィンさんですか。」

老けてない、老けてないよ姉さん？
・・・こほん
シネイドさんはとても美人だった。ベージュ色の髪をしててボクの髪型にちょっと似てる。
だけどちょっと怖そうな雰囲気・・・

「はいよ来ましたよーっと、んで用は？」
「ジェナの所在を確認できたので、タルティーンの司祭コレンを訪ねてください。」
「・・・それはフクロウでやらんかい。」
「善処しましょう。」
うわー、会話に入れない。

「ところでアシヴィンさん、そちらの方は？」
「あぁあたしの弟でスペルニア。剣士見習いだよ。」
「よろしくお願いします。」

シネイドさんは顔をしかめる。

「・・・信用できるのですか？」
「当たり前さね。」
何の話？

～タルティーン～

「コレンさーん、いませんかー」
「あぁ、ここだよ。」
「いないんなら帰りますよー」
「ここに居ると言っている・・・」
変な会話。

「ふぅ、ふぅ・・・いい加減見えないフリから会話を始めようとするのをやめないか」
「ひぃ、はぁ・・・やなこった（笑）」
１０分後、やっと姉さんの遊びが終わった。
長いこと立たされるボクの身にもなって？

「で、そこのエルフの少年は？」
何回聞かれる羽目になるんだろう
「あ、弟のスペルニア。剣士見習いであたしのパーティメンバーだよ。」
「ほー・・・アシヴィンの弟とは思えないな・・・」
「何をぅ！？」

これいつまで続くんだろうね

「ほい、こっち一丁上がりー。そっちはどう？」

「これで・・・終わり！」
ボクは最後のゴールドボーンアーチャーを倒した。
思いっきり防御が固くてきつかった・・・

「後はジェナみっけて・・・あぁいたいた」
影ミッション掲示板のすぐ近くに、ジェナさんはいた。

あるエルフの少年の物語　第１０話

（ジェナさんとの会話内容は、事情により省略。）

その後は次々に知らない人と会っていく。

元老王政錬金術師のレノックスさんにジャレスさんとか。

「うぇー・・・きつすぎる」

「大丈夫？」

怒涛の勢いでクエストをやってたからスタミナが０になってた。

「これ、最後のスタミナポーション。後で買わないとね」

「クエスト報酬で稼いだから２人分のスタミナポーションなんて楽々買えるわー

うふふふふ」

「その笑い、誤解されそうだね・・・」

久しぶりにのんびりとした会話をしてたら、またフクロウがクエストを

ぽふ。

「ぬぬぬぬぬぬ・・・」

姉さんは、頭でクエストを受け止める（物理的に）

「スタミナポーション飲んでる時にもってくるなぁあああああ！」
どうやらポーションを吹いたらしく、半分に減っていた。
「あーあ、意外にポーション美味しいのにもったいない・・・」
「え、美味しいかなコレ。」
「美味しいじゃないかアハハハハウフフフ♪」
「それ中毒だよ！？ちょ、ヒーラーさーん！」

今日はよく弓つかってて、戦闘終わったあとガブ飲みしてたからなぁ～・・・
たぶんさっきのがトドメになったのかも。

姉さんがやっと目を覚ました頃には、もう夜。
クエストすっぽかしたかも。
「うぁ～目が回る。」
「はい、水・・・飲める？」
「ありがと。」
姉さんは水を飲んで落ち着くと、顔が青ざめていった。
クエストに気づいたらしい。

「・・・もしかしてやばい？」
「たぶん。」
「あのおじさん、時間にうるさいんだよなぁ。今からでも行こうかにゃー」
「ボクは別にいいけど。」
そして城に向かった。

「遅いぞ。」
「あぁはいはいすみませんねぇ」
態度悪っ

この後の会話も事情により省略。（大人の事情なんだってさ）

あるエルフの少年の物語　第１１話

「あのおっさん嫌い」

何か気に食わないとすぐ嫌い嫌い言う姉さんは大人気ない。

「どこが嫌いなのさ・・・いい人だと思うけど」
「偉そうなのは全否定なの！あたしん中じゃね」
「わー・・・」
そこまで嫌いなのか。

ぽす。
また姉さんにクエストが降ってきた。（もちろん頭で受け取った。）

「はいはい今度はだ・・・」
言葉が切れた。

「どうしたの姉さん？」
「あー・・・更に嫌いな奴からだわ・・・」
クエスト内容が見えない。

「あんまりスペル連れて行きたくないけど・・・来る？」
「？」

どんな意味なんだろう。
危険ということなのか、それとも・・・

それでもボクはついていく。

「行くよ」

「うー、分かった。その代わり・・・あたしの側を離れないようにね？」

「うん！」

～数時間後～

「大丈夫・・・うわぉ！！」

27回目の行動不能。

痛い！めっちゃ痛い！錬金術師苦手なんだよー！！

水とか空気砲とか拳句の果て焼いてくるし・・・

「回復するから座りーにゃ」

「ありがと・・・姉さん」

包帯でぐるぐる巻きにされたあと、ヒーリングの魔法をかけてくれた。

「う、マナ切れた・・・」

「マナポーションないよ？」
「んやあれ使うから平気！スペルは一瞬目つぶってなー」
何をするの、と聞こうとしたとたん

姉さんが光に包まれた。
あの時のように・・・

「ふぅ・・・まだ慣れないなぁコレ」
「ねねねねね姉さんなにそれ」

そうまさにあの時の姿。
背中に半透明の白い翼をつけ、全身が光ってる。

「あ、スペル知らないか・・・これは『光の覚醒』っていうスキル。
神様の力を分けてもらってる感じ？」
「神様ぁ！？」

姉さん神様になっちゃったの！？

「おーい大丈夫かいな？」
「姉さんもモリアン様みたいになるの！？」
「お・ち・つ・け」
ゴンッ

「姉さん、ハンマーはひどいや・・・」
「目覚ますにゃーこれっくらいが十分でしょー」
たんこぶが出来た。

「ちなみに、あたしあんな天邪鬼おばさんにゃーなりたくないからね？」
「そこまで言う？」
一体どんな神様なのさ。モリアン様。

「よっし、メモいただきぃ！」
「それドロボウ・・・」
「いーから行くよほらほらほら」
ぐいぐい押してくる姉さん。誤魔化しきれてないよ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0094x/

迷い音は一つの楽器に

2011年10月12日14時51分発行